

『東京市政調査会寄付に関する安田勤儉翁の真意』

後藤新平 著

1922年 菊判／69頁 図書番号 OJZ-0047

財団法人東京市政調査会は、1922（大正11）年2月24日に内務大臣により設立を許可され、有楽町にある愛国生命保険会社の建物の3階に事務所を構えた。20万円ずつの匿名の寄付が2口あり、資産40万円での発足であった。その後、3月9日に初代安田善次郎の遺志をついだ嗣子から350万円の寄付を受けることになる。その経緯を、財団の設立者である後藤新平が明らかにしたのが本書である。

1920年12月11日、後藤が会長を務める都市研究会は、各界の有力者90余名を招き、市民の自治観念を啓発する方策についての相談会を開催した。この時の後藤の演説を聞いた安田は、演説の趣旨に賛同するので何か協力をしたいと申し出たという。後藤は、かねてより念頭にあったニューヨーク市政調査会について安田に説明した。

さらに市政調査機関の具体案について説明を求められたので、後藤の腹案として、会館の設計図面と予算を添えて、建築経費に350万円を要すること、会の維持は建築経費の年利1割すなわち35万円を貸事務所料より取り上げると仮定し、うち15万円ないし20万円を調査費に、その他は積立金等に充てること等を説明した。

やがて両者は、後藤が安田からの寄付を受けて、東京市政改革のために調査機関を設けることで合意し、1921年の6月には覚書を交わすに至ったという。

後藤は安田との会談を述懐し、安田の寄付の真意を次のように説明する。かつて安田は後藤に、「あなたのいわゆる8億円計画は失礼ながら閣下としては小さすぎはしませんか」と問いかけて、その資金は安田がひとりで準備できると申し出たことがあった。そして今度は、後藤が東京市民全体の利益のために市政調査機関を設立しようとするのは、安田が考える防貧としての慈善事業と一致するので、是非その手伝いをさせて欲しいと申し出たのである。安田のこの真意を受けて、後藤は計画実行のために考慮を重ね、準備を進めていたのである。

ところが同年9月28日、安田は不慮の死を遂げる。そののちに大磯にある安田別邸の手文庫から寄付に関する覚書が発見されて、遺族により寄付が実行に移されたのである。寄付には、日比谷公園内東北隅に公会堂付設の会館を建設すること、公会堂は市の管理に委ね、それに伴う収入支出は市に帰属させることなどの条件がつけられてあった。

後藤は安田の求めに応じて、老子の文中から「與善仁」の字句が入った書を贈っていたという。「與善仁」とは、「理に背く恵みを與ふなよ やふさかなりと人はいふとも」、「理に背く恵みを受くるなよ 受けじてよしや命絶ゆとも」という古歌に通じる意味をもつことを、後藤が安田に話したのがふたりの最後の会談になったそうだ。1921年8月から9月頃であったと思われる。

後藤がかねてより提唱していた一大国策調査機関の創設は実現しなかったが、東京市長として東京市政の改革に取り組んでいた後藤にとって、東京市政調査会の設立に対する安田の理解と支援は大いに有り難かったに違いない。本書からは、安田に対する後藤の恩義の気持ちが伝わってくる。

（田村靖広・市政専門図書館司書課長）